

アグリ★ルネッサンス

農業経営きょうと

No.102
2018.春



長澤農園 長澤環さん(右)と忠夫さん

CONTENTS

クローズアップ この経営者！…………… 2 ページ
毎日稼げる施設野菜経営を実施
― 地域の担い手就農もサポート ―
長澤農園(亀岡市西別院町)

チャレンジ農業法人…………… 4 ページ
小松菜農家から「地域を守る法人」へ
― 利益重視の経営で地域に貢献 ―
有限会社 グリンハウス南(久御山町)

平成30年度「きょうと農商工連携応援ファンド
支援事業助成金」の募集について…………… 6 ページ

「農業経営の雇用を考える」勉強会のご案内…………… 6 ページ
「農業法人設立講座・農業簿記講座」を開催 …… 7 ページ
京力農場づくり推進大会に約500人集う …… 7 ページ

農業法人ニュース…………… 8 ページ
― 京都府農業法人経営者会議の取り組み ―
■ 経営改善セミナーin京都
■ 近畿府県農業法人組織現地交流会

編集局から…………… 8 ページ

クローズアップ

この経営者！

毎日稼げる施設 野菜経営を実施

——地域の担い手就農もサポート——



長澤農園 代表 長澤 環さん

亀岡市西別院町・長澤農園

ながさわ たまき
長澤 環さん(45)・忠夫さん(73)

長澤環さんと父の忠夫さんが経営する長澤農園は、昭和50年代からいち早くトマトの水耕栽培に取り組み、独自の技術システムと経営ノウハウで安定した野菜経営を確立。また、後継者不在に悩む地域の「農」の底上げを図るために移住研修生を受け入れ、後進の指導にも力を入れている。

毎日売り上げがある農業

長澤農園は、亀岡市街地から約10km、大阪・摂津方面に向かう山あいの犬甘野地区にある。農園の代表者である環さんの父忠夫さんは、大学で電気工学を学び、貿易会社に勤めていたが、両親の高齢などで1979年にUターンして農業を継いだ。農地は傾斜地が多いため、当時まだ珍しかったトマトの水耕栽培に挑戦。現在は、



長澤農園のスタッフ
(左から奥澤さん夫妻、長澤環さん、忠夫さん、白石さん夫妻)

ガラス温室2棟(計65a)でトマトやキュウリ、レタスなどを周年栽培している。

年間販売額は4,000万円に達する。「毎日売り上げがある農業」が長澤農園のキャッチワードだ。

働き手は、農園の代表である環さんと両親の忠夫さん・暉子さん(71)、研修生の白石真也さん(47)・暁子さん(40)夫妻、元研修生の奥澤義嗣さん(45)・登喜さん(44)夫妻も手伝いにやってくる。

独自の技術と販路を確立

忠夫さんは「農業を魅力ある産業にするには、異業種の技術やアイデアを農業分野に活用していくことが大事」という。ガラス温室の中は、地下水を利用した冷暖房や室内の温・湿度管理、日照不足を補うためのLED照明など、さまざまな情報を感知するセンサーによって自動制御する。そして収集したデータを読み解き、防除の量やタイミング、収穫時期を予測する。そのシステムはすべて忠夫さんがつくり上げたものである。



独立就農した奥澤さん夫妻



研修中の白石さん夫妻

また、“毎日稼げる農業”を実現するためには、安定した販路を確保し、ビジネスとして成り立つ仕組みづくりが必要だ。そこで地元の（農）犬甘野営農組合に直売所を立ち上げるとともに、J A 京都亀岡直売部会（会員58人）の部会長として亀岡産農産物の有利な販売ルートを開拓。亀岡市内をはじめ京都市、大阪府、兵庫県内の西友、平和堂など量販店に直売コーナーを設けた。

研修生に技術と経営を伝授

そんな長澤農園のユニーク経営に惹かれる研修希望者も多く、6年前から研修生を受け入れている。現在の奥澤さん、白石さんはともに脱サラ組だ。奥澤さんは2年間の研修を経て昨年独立し、農園の近くでハウス3棟(12a)と水田30aを借りてハウレンソウ、ミニトマトを栽培。北海道出身の白石さんは昨年からは研修中で、奥さんの暁子さんは農園の正社員として選別、出荷作業に従事している。

「我々を受け入れてくれた農園と地域に恩返しの意味も込めて、安定して稼げる野菜農家をめざしたい」と奥澤さん。白石さんは「師匠に教えを請う毎日ですが、早く仕事を覚えて奥澤さんに負けないよう頑張りたい」と意欲的だ。



地域の耕作放棄地再生に取り組む
（中央が忠夫さん）

次世代のため放棄地再生も

忠夫さんは「集落を守っていくためには多くの新規就農者を受け入れ、そして定住してもらうだけの収入確保が必要」と説く。研修生募集にあたっては『年間売り上げ1,000万円』をアピール、そこには作業だけでなく、販売もできるようにという願いが込められている。

最近、耕作放棄地の再生にも取り組み始めた。「農園は地域の一員でないといけない」と忠夫さん。放棄地の草刈りに始まり、法面の補修、水路の整備に至るまで、奥澤さん、白石さんとともに取り組む。同時に、研修生が独立したときに圃場の一部として利用し、経営基盤にしてほしいとの思いからである。

『地域が支え、地域を支える経営』地域とともに歩む今の長澤農園の姿そのものだ。



毎日、スーパーの直売コーナーへの出荷作業に追われる



小松菜農家から 「地域を守る法人」へ —利益重視の経営で地域に貢献—



(有) グリンハウス南は家族全員で支え合う(中央が南和弘さん夫妻)

有限会社 グリンハウス南

久御山町

- 代表取締役 南 和弘
- 設立年月 2005年10月
- 労働力 家族5名、パート1名
- 資本金 350万円
- 事業内容 「小松菜を主とした施設野菜と水稻作業受託」
ハウス24棟(小松菜、万願寺とうがらし、菊菜)
- 設備・機械 米乾燥調製機1台、トラクター4台、田植え機・コンバイン各1台

小松菜の周年栽培に挑戦

木津川右岸に水田や畑が広がる久御山町佐山地区。「グリンハウス南」代表取締役の南和弘さん(52)は農家の3代目で、視野を広めようと運送業に携わった後、35歳のときに就農した。

就農時、両親の勲さん(84)・佐和子さん(80)は水稻とネギ、ホウレンソウ、菊菜などの野菜を栽培していたが、多品目ゆえのコスト増が悩みの種だった。そこで和弘さんは、端境期がなく手間もかからない小松菜の周年栽培に着目。父の反対を押し切って、転作田にハウスを設



南和弘さんと奥さんの祐子さん

置し、小松菜栽培一本に絞って取り組むことに。読みは当たり、ハウスは5棟から14棟へたちまち拡大した。

しかし、「10年後を考えたとき、地区の農業を守る存在になりたい」と考え、2005年に法人を設立。いまはハ

ウスを24棟（計1.0ha）に増やし、やがて小松菜の価格低迷を見越して「万願寺とうがらし」（ハウス7棟、3月～10月）、菊菜も取り入れている。

小さな信頼を大切にする

「グリーンハウス南」の強みは、地域との強固なつながりにある。ここでも高齢化や後継者不足は深刻で、農地の面倒をみてほしいという農家が多くなってきたため、和弘さんは作業を委託していた自家の水稲作を2010年から再開。同時に、農家から頼まれて水田の作業受託にも力を入れ、地域の農地維持に努めている。

J Aとの信頼関係も見逃せない。法人化の相談や指導だけでなく、作目選択もJ Aの勧めによる。小松菜は年間45tを出荷、万願寺とうがらしの栽培はJ A京都やましる管内で最大規模だ。

販売はJ Aを通して出荷している。「農業は地域や関係団体との信頼関係がないと始まらない。小さな信頼を積み重ねるという考え方が、取引相手の信頼を得、安定した値が付くことにもつながる」と和弘さんはいう。

「売上高」より「利益」重視

年間販売額は、施設園芸と水田の作業受託を合わせて約2,000万円。労働力は、和弘さん、奥さんの祐子さん（48）、両親と姉の家族5人とパート1人の計6人。かつてパートを6人雇用していた時期もあったが、収穫と播種を同時に行うなど作業の効率化を重視し、短時間で作業を終えられるように心がけている。

「少ない人手で作業時間をいかに短くできるかが勝



小松菜の出荷作業に励む

負」と和弘さん。小松菜の周年栽培も、少人数、短時間労働で利益が上げられると考えて、地域で最初に取り組んだ。

この佐山地区は木津川が運ぶ肥沃な土壌、都市近郊と立地条件は申し分ない。しかし、和弘さんは「いくら好条件がそろっていても、儲からなければ後継者は育たない。経営に関しては、売り上げの拡大より、いかに利益率を高めるかが大事」と力を込める。

地域に貢献できる法人に

これまで経営は順調に推移してきた。水田の作業受託は現在1.2haだが、機械化体系が確立された稲作なら20haまで拡大できると和弘さんはみている。

「野菜産地なので、周りの農家と共同で取り組むのは難しいが法人経営を通して若い人に農業の可能性を感じてもらいたい」と意欲を燃やす。これからも作業効率を考えながら小松菜を規模拡大していくつもりだ。「儲かる経営で地域に貢献できる法人」をめざす和弘さんの挑戦が続く。



両親も小松菜収穫作業の貴重な戦力だ



農業の可能性を感じてもらいたい



木津川右岸に24棟が並ぶハウス群

異業種交流によるビジネス創出を支援します

平成30年度「きょうと農商工連携 応援ファンド支援事業助成金」の募集について

京都産業21では、府内農林漁業者と中小企業者が連携して行う新商品・新サービスの創出に向けた取組を支援します。30年度事業の募集を下記のとおり実施しますので、ぜひご活用ください。

対象事業者 ▶ 府内の農林漁業者と中小企業者の連携体
対象事業 ▶ 府内の農林漁業者と中小企業者が密接に連携し、それぞれの強みを活かして創業や経営の改善・向上を図る
 ※詳細は、「助成金の御案内」をご覧ください。

助成率等 ▶ 助成率：対象事業費の2/3以内
 助成限度額：1申請事業あたり300万円以内
 助成期間：原則平成31年2月28日(木)まで
 ※特例として、平成31年10月31日(木)までの事業実施が可能

申請方法 ▶ 平成30年度の助成金の御案内により申請してください。
 ※助成金の御案内はホームページからダウンロードできます。
 ※申請に関することは、右記のお問合せ先にご連絡ください。

審査・採択 ▶ 審査委員会において、書面審査と面接審査を行い、事業の新規性、実現の可能性、地域活性化への波及効果などを総合的に判断のうえ、助成事業を採択します。採択決定は平成30年7月上旬の見込みです。

ハンズオン支援 ▶ 採択事業者は、事業の推進に際して、農業ビジネスセンター京都のサポートチームをはじめ、専門家からアドバイスを受けることができます。
 ※また、農林漁業者が連携体代表者の事業については、担当アドバイザーが商品企画から販売促進までを総合的に支援します。

募集期間 ▶ 平成30年3月1日(木)～4月25日(水)

※詳細は財団ホームページをご参照ください。

<https://www.ki21.jp/noshoko/>

※3月中旬に個別相談会を開催する予定ですので、下記にお問合せください。

お問い合わせ先

京都府農林水産部経営支援・担い手育成課

TEL：075-414-4908

京都府山城広域振興局農林商工部地域づくり推進室

TEL：0774-21-2186

京都府南丹広域振興局農林商工部企画調整室

TEL：0771-22-0371

京都府中丹広域振興局農林商工部企画調整室

TEL：0773-62-2508

京都府丹後広域振興局農林商工部企画調整室

TEL：0772-62-4315

農業ビジネスセンター京都

TEL：075-417-6888

(公財) 京都産業21 クール京都推進部
 京都創生グループ

TEL：075-315-8848

「農業経営の雇用を考える」勉強会のご案内

農業経営の規模拡大や経営安定に欠かせない雇用について、現状や仕組みを把握し、今後の経営展開に繋げるための勉強会を開催します。

多くの農業経営者の皆様のご出席をお待ちしています。

日時 3月16日(金) 14:00～17:00

場所 ルビノ京都堀川

勉強会 ①最近の雇用情勢や雇用等についての留意点
 ②農業就業希望者へのSNSを活用した情報提供
 ③京都式農福連携 ④外国人材の活用 ⑤意見交換会

お問い合わせ先：(一社) 京都府農業会議 担い手育成課 TEL：075-441-3660

● 「農業法人設立講座・農業簿記講座」を開催 ●

農業会議では、12月から1月にかけて、「農業法人設立講座」（南部会場、中部会場）と「法人会計・パソコン農業簿記講座」（北部会場、中部会場、南部会場）を開催し、府内の集落営農組織や認定農業者など、延べ172名が受講しました。

「農業法人設立講座」（写真右）では、担い手支援スペ

シャリスト（司法書士・税理士・社会保険労務士）から、法人の設立手続き、税務、会計、雇用・労務管理のポイントを研修しました。

「法人会計・パソコン農業簿記講座」（写真左）は、1日目に税理士が複式簿記の仕組みや記帳について講義。2日目に農業簿記ソフトの実践的な操作方法を学びました。



パソコン農業簿記講座（中部会場）



農業法人設立講座（南部会場）

● 京力農場づくり推進大会に約500人集う ●

1月30日（火）ガレリアかめおかで「京力農場づくり推進大会」が開催されました。

「新たな米政策のもとでの稲作の担い手づくりを考える」をテーマに、府内各地の農業者、営農組織、JA、行政関係者ら約500人が参加しました。

石川県羽咋市元職員の高野誠鮮さんが「集落の活性化と神子原米のブランド化」と題して基調講演。

山間部の限界集落で若い世代の移住や神子原米の高級ブランド化など、地域活性化に取り組んだ経験を紹介いただきました。

その後、「中山間地の稲作を誰が担うのか？－京都発！条件不利地域の水田を守るヒント－」をテーマに、龍谷大学農学部香川文庸教授をコーディネーターに、基調講演を頂

いた高野誠鮮さん、福知山市の㈱アグリサポート夢の成田哲也さん、伊根町の㈱水農江の藤原正人さんがパネリストとして実践報告しました。

JA出資法人の㈱アグリサポート夢は、条件の良い農地を地元担い手に、条件の悪い農地を引き受ける役割分担で地域全体の水田農業を確立。㈱水農江は地域の稲作を一手に引き受けることで、若手農業者に施設園芸に集中できる環境を作り上げた活動を報告しました。



基調講演 石川県羽咋市元職員
高野誠鮮さん



パネルディスカッション左から
香川教授、藤原さん、成田さん、高野さん

農業法人

ニュース

— 京都府農業法人経営者会議の取り組み —

■経営改善セミナー in 京都

12月26日(火)、日本農業法人協会主催の「経営改善セミナー in 京都」が京都市内で開催されました。

今回のセミナーは、一般社団法人日本能率協会の中野健太郎氏を講師に「経営課題の把握」をテーマにワー

クショップを実施。出席者は、現在の事業の流れを図式化し、自社の特色・差別化ポイントの把握や収益性の考え方等、自分の目指す目標を達成するためには何が必要なのか、何が課題なのかを再確認する作業に取り組みました。



■近畿府県農業法人組織現地交流会

1月30日(火)～31日(水)の2日間、滋賀県草津市内で、近畿6府県の農業法人経営者の交流会が開催され、110名の経営者、関係者が参加しました。

農業法人の競争力を強化するため「儲かる農業」「最先端農業」をテーマに、基調講演、情報交換会、農場

見学会が行われ、京都府内から7法人が参加しました。

参加者は、近畿における農業の現状や(株)ゴトウ経営代表取締役 後藤昌幸氏の基調講演(演題「儲かる会社に革新するには!」)に耳を傾け、滋賀県甲賀市(有)るシオールファームの農場見学会に参加しました。



滋賀県農業法人協会宮尾会長の開会あいさつ
(有)グリーンパワー長浜代表取締役)



編集局から

- ◆今回は、水耕栽培に取り組みながら、集落に農業の担い手を育てるため奮闘されている長澤農園と、地域の農地を預かりながらハウスの規模拡大を進めている(有)グリーンハウス南取材しました。地域農業を支える経営体として今後の活躍を期待しています。
- ◆農業経営体における雇用者の確保が困難となってきた現在、

農業と福祉施設との連携や外国人労働者を迎え入れる等の試みが進んでいます。今後の農業の担い手、雇用対策をどの様にしていくのか、根本的な対策が急がれます。

- ◆「京都府水田農業ビジョン」が作成され、需要の多い「京の輝き」や「大小豆」などの作物の生産拡大を重点に進めるとともに、主食用米は地域の実態や作付けの意向を重視しながら、現状の作付け規模を維持することとされました。

発行/2018年3月

発行者 (一社) 京都府農業会議(京都府担い手育成総合支援協議会事務局)

〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 京都府庁西別館内 TEL.075(441)3660(代)